資料

ヒロズキンバエによる傷ハエ症の1例

上村 清* 荒川 良* 小杉 光世**

* 富山医科薬科大学医学部寄生虫学教室

(〒930-01 富山市杉谷 2630)

** 市立砺波総合病院外科

(〒939-13 砺波市新富町 1-61)

(受領: 1990年11月13日)

A case report on wound myiasis due to the common green bottle fly, *Phaenicia sericata* (Meigen)

Kiyoshi KAMIMURA,* Ryo ARA-KAWA* and Mitsuyo KOSUGI**

* Laboratory of Parasitology, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University, Toyama 930-01, Japan

** Department of Surgery, Tonami General Hospital, Tonami 939-13, Japan

Key words: myiasis, wound myiasis, *Phaenicia sericata*, green bottle fly, purulent pleurisy, Japan.

傷ハエ症は外国ではしばしばみられるが、日本国内からは8例しか知られていない(弓場, 1951; 木根淵・池村, 1972; 高屋・上野, 1977; 長谷川ら, 1979; 可児ら, 1981; 山口・藤本, 1983; 橋本ら, 1987; 千種・杉山, 1987)。今回、著者らは富山県砺波市在住の76歳男性の膿胸患者の患部からヒロズキンバエ幼虫を多数採取したので報告する。

症 例

患者: 男子, 76歳, 富山県砺波市山王町在住, 無職。
主訴: 慢性膿胸, 胸痛。

既往歴: 約10年前から胸水を認め、近医にて内科的治療を受けていた。1986年に左胸腔内の腫瘍が巨大化して左胸腔を占拠し、心臓を右方圧迫したため、急性循環不全となり、市立砺波総合病院に入院し、同年10月2日に腫瘍摘出術を受けた。術後膿胸となり、腫瘍部は厚い痕跡状の膠原線維性の膿胸壁となって、部分的に異物肉芽腫が散在し、悪臭を伴っていた。1987年2月末に退院し、週1回通院し、左胸患部を洗浄し、毎回40~

110 ml の粘稠赤色液を排出していた。洗浄すると血液の少量混入を認めるが、痛みはなかった。

現病歴: 1990年8月28日通院時には痛みも発熱もなく、ハエ幼虫は認められず、生食150 mlで左胸患部を洗浄した。9月2日より痛みと微熱(37.2°C)を生じ、ハエ幼虫の寄生に気付いて9月4日に来院した。ドレーン周辺から多数のハエ幼虫が這い出てきたので、左胸患部を調べ、鉗子で約60匹のハエ幼虫を摘出除去した(Fig. 1)。

臨床一般検査では白血球数14,900、顆粒球74.9%と多く、リンパ球18.6%、血小板数326,000で、赤血球沈降速度86 mm/1 hr, 132 mm/2 hr, CRP 8.7 mg/dlと高く、ZTT 22.5, TTT 9.4であった。生食300 mlで洗浄し、腎盂カテーテル、胆汁パックなどを交換し、リンデロン VG 軟膏10 g、亜鉛華軟膏10 gを塗布した。9月7日入院時には、痛みは軽減しており、ハエ幼虫は見当たらず、平熱であった。9月11日生食100 mlで洗浄処理したが、皮膚かぶれが9月14日まで続いた。

虫体所見

9月4日に摘出された虫体はいずれも生きており、体長約8 mm、乳白色で、頭部は細まり、尾端は裁断状で6対の肉質突起を有す。後方気門は梨状で、周輪は薄く、周囲環は完全でボタンを有し、気孔は細い。クロバエ類の3齢幼虫と思われたので、25°Cの恒温槽で、15匹には9月5日に馬肉10 gを与え、他には餌を与えずに、腰高シャーレにおのおのおがくずとともに入れて飼育したところ、9月6日から8日にかけて、いずれも蛹化した。長さは給餌個体では蛹7.5~8.2 mm、成虫9.0~9.5 mm、給餌しなかった個体では蛹5.9~6.4 mm、成虫6.3~7.0 mm。成虫は金緑色光沢を呈し、触肢は橙色、後頭部小剛毛は3~7本、正中剛毛は3+3の対をなし、翅の鱗弁は黄白色で、下部鱗弁の背面に小毛を欠く。これらの形態的特徴から、本種はいずれもヒロズキンバエ *Phaenicia sericata* (Meigen, 1926) と同定された。

考 察

ヒロズキンバエは世界に広く分布するが、熱帯よりも温帯地方に多く、日本では人家付近にもっとも普通のキンバエである。幼虫は通常動物の死体に発生するが、堆肥や台所の生ゴミにも生育し、25~27°C下で卵期1日、1・2齢期1日、3齢期3~4日、蛹期6~7日である(篠永, 1990など)。摘出された幼虫に肉片を与えると盛んに食べて成育し、幼虫期が少し長びいたことから、3齢中期の幼虫を摘出したと判断される。おそらく、8月30

Fig. 1 The purulent pleurisy involving the wound myiasis on the left chest of a 76-year-old man.

日ごろに自宅において、患者のドレイン周辺にもれた浸出液にヒロズキンバエ雌成虫が産卵し、孵化幼虫が傷口から左胸患部に侵入して痛みをもたらしたのであろう。ヒロズキンバエは悪臭を発する創部に集まることが知られている (Townsend and Hall, 1976)。本症の臨床検査成績の炎症を示唆する異常値は、ハエ幼虫の寄生に基づくばかりではなく、多くは細菌感染によるものと思われる。ヒロズキンバエは通常 300 卵前後を産むが、摘出できたハエ幼虫は 60 匹にとどまった。ほかに患者自身が除去した虫体もあったもようだが、詳細は不明である。

ヒロズキンバエによる傷ハエ症は、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなどに多数知られている (James, 1947; Townsend and Hall, 1976; Khan and Khan, 1987 など)。かつては不潔な潰瘍などの傷口をきれいにするという考えで治療に用いた時代もあった。日本では本種によるハエ症は、高屋・上野 (1977) が 57 歳女子患者の後頭部基底細胞上皮腫から、矢崎ら (1984) が 90 歳男子患者の尿道から、千種・杉山 (1987) が 79 歳男子患者の頸部腫瘍壊死部から報告しているのと合わせて 4 例にしかすぎないが、全国にごく普通に分布しているキンバエなので、潰瘍患者などが不潔な環境におかれた場合には本種に産卵寄生される可能性が十分考えられる。本例は院外で産卵されたと思われるが、清潔を旨とする病院においても、ハエの侵入が認められる所は多いので、術後患者などの衛生管理にはハエ症も念頭において強化を図ることが必要と思われる (上村・荒川, 1986)。

本種の同定を確認していただいた国立予防衛生研究所衛生昆虫部倉橋 弘博士に深謝します。

引用文献

- 千種雄一, 杉山貴志子 (1987): ヒロズキンバエによるハエ幼虫症の一例. 愛知医大医誌, **15**: 655-658.
- 長谷川英雄, 関川弘雄, 関 吉郎, 細川みえ子 (1979): 新潟県でみられた蠅蛆症の 1 例. 新潟医学会誌, **93**: 612-614.
- 橋本明彦, 衛藤 光, 竹崎伸一郎 (1987): Myiasis を伴った eccrine poroepithelioma. 皮膚病診療, **9**: 549-552.
- James, M. T. (1947): The flies that cause myiasis in man. *U. S. Dept. Agric. Misc. Publ.*, No. 631: 1-175.
- 上村 清, 荒川 良 (1986): センチクバエによる鼻ハエ症の 1 例. 衛生動物, **37**: 163-164.
- 可児淳朗, 中村 治, 大野晴美, 長瀬啓三, 戸谷徹造, 森下哲夫, 小山恵三, 岩田重信 (1981): センチクバエによる外部蠅症について. 衛生動物, **32**: 23-28.
- Khan, M. A. J. and R. J. Khan (1987): Hematoma of scalp in a baby caused by the common green bottle-*Lucilia sericata* (Meigen) (Diptera: Calliphoridae) in Karachi. Pakistan. *Jpn. J. Sanit. Zool.*, **38**: 103-105.
- 木根淵承一, 池村郁男 (1972): 人体蠅 (幼虫症) の 1 例. 臨床皮膚科, **26**: 331-339.
- 高屋通子, 上野 陽 (1977): 基底細胞上皮腫にみられた人体蠅症の 1 例. 皮膚科の臨床, **19**: 465-468.
- Townsend, L. H. and R. D. Hall (1976): Human myiasis in Virginia caused by *Phaenicia sericata* (Meigen) (Diptera: Calliphoridae). *Proc. Entomol. Soc. Wash.*, **78**: 113.
- 篠永 哲 (1990): ハエの分類と生態. 害虫シリーズ 5 ハエ・蚊とその駆除, pp. 1-67, 日本環境衛生センター, 川崎.
- 弓場正義 (1951): 肺壊疽性膿胸の 蠅蛆自然発生による治験例. 東京医事新誌, **68**(3): 39.
- 山口 昇, 藤本和義 (1983): 切断された陰茎に発生したハエウジ症. 衛生動物, **34**: 126 (抄録).
- 矢崎誠一, 福本宗嗣, 吉田勝彦, 石田晤玲 (1984): 蠅幼虫症の 2 例. 衛生動物, **35**: 209 (抄録).

Summary

Sixty third instar larvae of a green bottle fly were found in the purulent pleurisy on the left chest of a 76-year-old man, who lives in Tonami City, Toyama Prefecture. These larvae, about 8 mm in length, were reared until emerging into adults and identified as *Phaenicia sericata* (Meigen). This is the fourth report on human myiasis in Japan by this species.